



忙中楽あり

中嶋嶺雄

(東京外国語大学教授
国際関係論・現代中国論)

〔1〕

1989年は歴史的な中ソ首脳会談や中国の天安門「血の日曜日」事件などのために、私の日常生活はいつになく多忙であった。海外出張も数多く、現在もモスクワのソ連科学アカデミー極東研究所や天津の南開大学での講演と学術交流のためソ連・中国を訪問中である。

だがよくしたもので、好きな音楽を聴く機会はかなり増えていて、数日前にもレニングラード・フィルハーモニア大ホールでブルックナーの交響曲第7番を満喫した。

聴くだけではなく、最近はずからヴァイオリンを弾くことも多い。去る6月下旬には、台北で「アジア・オープン・フォーラム」第1回会議が開かれた。このフォーラムは日台間の新しい知的交流の場として設定されたもので、私が日本側の秘書長であったから大変忙しかったが、才能教育研究会のヴァイオリン指導者で著名な鈴木鎮一先生の姪の石川裕子さんがたまたま台北公演に来られていたので、フォーラムの開幕式に貴賓として挨拶された李登輝総統にご紹介したところ、音楽好きの総統は、その日の午後、石川さんを曾文恵夫人とお茶に是非招きたいと仰言った。私はフォーラムの会場を小一時間抜け出して総統宅へ彼女をお連れしたのだが、総統夫人は石川さんの演奏で楽しい一時を過ごされた。この時は私も一曲と所望されたので、いつも弾いているバッハのブーレを演奏し、総統夫人のお耳をけがしたものである。

その少し前の5月19日夜は、音楽文化同好会の春の定期会合が赤坂プリンスホテル別館グリ

ーンホールで開かれ、私が中心の室内楽の夕べが催されるという光栄に浴することができた。音楽文化同好会は、木田宏・元文部次官（現独協学園理事長）や吉村融・埼玉大教授、それに当東京書籍の小高民雄社長らの音楽好きが政・財・官・学界の同好人士を募ってつくった集まりで、今は首相になった海部俊樹氏も有力会員の一人である。普段はプロの演奏家を招いて聴くのだが、この夜は音楽好きの集まりというこの会の趣旨にのっとった初めての試みとして私のようなアマチュアに演奏の機会を与えてくれるという。

〔2〕

会合は通常、夕食を含めて3時間以上になるので、私一人ではとても場がもたない。そこで日頃、拙宅にお集まりいただいている友人、知人を中心に急場の室内楽団を組織したのだが、みな忙しいメンバーなので、ついに全員が揃っての練習はできずに、当日夕方のリハーサルだけで本番に臨んだ。私自身も、中ソ首脳会談にぶつかって、NHKの衛星放送や総合テレビの解説をつとめていたので、練習の時間がほとんどなく、そのかわり番組の合い間に空いているNHKのスタジオを一人で使わせてもらって練習した。当日はまず前半が私と給田英哉氏（丸紅国際業務部長、元東大オーケストラ・コンサートマスター）、石川裕子さんの第一ヴァイオリン、玉木輝一氏（大修館書店情報企画部長で私の編著『地域研究の現在』の担当者）と斎藤牧子さん（個性的な演奏活動をつづけるフリー・ヴァイオリニスト）の第二ヴァイオリン、横瀬庄次氏（文化庁次長から文部省生涯学習局長になられた直後で元東大オーケストラ）と私の長男、中嶋啓雄（大学4年生でICUチェンバー・オーケストラ）のヴィオラ、村上陽一郎氏（科学史、科学哲学で知られる東大教授で同じく元東大オーケストラ）と光田聰子さん（国際交流

基金常務理事の光田明正氏夫人で、多摩室内合奏団奏者）のチェロ、林正道氏（内外施設工業社長で今も電通大オーケストラの有力メンバー）のコントラバスで、アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク（モーツァルト）で幕を開けた。次にアメリカ大使館一等書記官のアルバート・ボール氏ピアノ伴奏で給田、石川、斎藤、中嶋という松本音楽院出身者4人がエックレスのヴァイオリン・ソナタ（ト短調）を子供の頃同様に暗譜で全曲斉奏し、食事前のしめくりには、村上陽一郎氏が姉の紀子（東京ゲート・インスティテュート講師）のピアノでベートヴェンのソナチネ（二短調）を独奏した。後半はプロ並のクラリネット奏者リチャード・ダッシャー氏（米國務省日本語研修所長）の音に支えられて私たちがモーツァルトのクラリネット五重奏曲（イ長調）を全曲演奏した。最後は、私と給田氏のソロでバッハの二つのヴァイオリンのための協奏曲第1楽章を弾いたが、絃のメンバーと日頃国際交流に音楽を役立てている光田氏のチェンバロが伴奏してくれるという豪華なものであった。

当日は120～130名の出席者があり、盛況であったが、司会の音楽評論家・丹羽正明氏はさぞはらはらされていたことだろう。弾いている本人たちは緊張もしていたけれどもそれ以上にとにかく楽しく私としては初めて演奏でいただいた“ギャラ”で、全員がささやかな二次会をもった。

ところが、夜11時近くに家に帰った途端、わが家の電話が鳴り続けた。北京に戒厳令がしかれそうだという。以来6月4日の血の日曜日を経て、私は再びTV出演や原稿執筆、講演などに忙殺されることとなり、さらに拙著『中国の悲劇』（講談社）の緊急出版が加わって、連日の徹夜がしばらく続くこととなったのである。

（1989年11月26日、北京にて）

'90-1 教室の窓

小学校

397

●特集——新学習指導要領への移行



東京書籍